

# 明治末の米国人留学生チャールズ・ジヨナサン・アーネル

——忘れられた日本学者の生涯

古俣達郎

はじめに——明治末の留学生

明治末、日清戦争・日露戦争の両戦役における日本の勝利を契機として、多くの外国人留学生が日本を訪れるようになった。それらの学生群のほとんどは東アジア圏からの留学生であり、その大部分が清国からの留学生であった。急増する清国留学生（留日学生）の受け皿として、法政大学清国留学生法政速成科、明治大学設立経緯学堂、早稲田大学清国留学生部などが次々に設立され、私立大学を中心に明治末日本の高等教育機関は留学生ブームに沸いた。さねとうけいしゅう『増補版 中国人日本留学史』（くろしお出版、一九八一

年）によれば、一九〇六（明治三十九）年前後の清国留学生数は八千人以上の規模に達するという。<sup>1</sup>

大量の清国留学生がいた一方で、日露戦争以後の留学生の中には少数ながらも欧米諸国からの留学生が含まれていた。数少ない欧米人留学生のほとんどがロシア人であったが、彼らロシア人が日本に赴いたのは、明確な理由があった。すなわち、日露戦争において、彼らの祖国ロシアに打ち勝った日本という国は果たしてどのような国であるのかという問いである。

当時の新聞報道には、日本の教育機関への入学を望むロシア人の姿が報道されている。例えば、一九〇六年四月九日付の『東京朝日新聞』には、齢二十四、五歳の美しいロシア人青年がロシア公使館

を訪れ、ロシア公使コザリフに東京帝国大学への入学を涙ながらに懇請する姿が報道されている。この青年はコザリフに次のように訴えたという。

今回の日露の戦争は実に余に精神的大革命を与えたり余が小なる頭脳は従来我本国たる露西亜を以て世界に於ける最も強大にして進歩せる国なりと思惟せり然るに何ぞや蕞爾たる日本と戦ひて連戦連敗せるのみならず国内には各種の革命的暴動続発してザーの權威を以てするも亦之を鎮圧するを得ざらんとは、余は是に於て大に迷へり然ども其後の研究により敵国たりし日本の連戦連勝せし所以を知り爾来日本の文明を研究せんとするの念日に増し盛にして遂に今回渡航し来るなり就ては之より東京帝国大学に入りて大に研究せんと欲す<sup>2)</sup>

この若きロシア人青年の説くところは、日清戦争以降に開始された清国人たちの留日理由と通底するものがある。その理由とは、有史を通じて、遙かに大国であった中国に勝利した明治日本とはどのような国家であり、その近代化の達成はどのようなようになされたのか、という問いである。いうまでもなく、その頃の中国では、ロシアとは違って、列強から植民地化されるという強烈な危機意識が生じていた。そのため、急速な近代化を図ることを目的に、たとえ、「速

成」であろうとも、大量の留学生を送り込み、近代化を担う人材の養成を急がねばならなかったのである。いわば、留日は国家の生存を賭けた大規模な政策として行われたのであって、その点、あくまで個人単位の留学であったロシアとの違いは明らかである。ただし、両者とも日清・日露戦争で生じた「日本の衝撃」（山室信一）を受けとめることによつて日本への留学が行われた点で相通じているのである。<sup>3)</sup>

同年十二月十八日付の同紙<sup>1)</sup>には、日露戦争以後、数十名のロシア人学生や軍人が訪日し、日本語を学んでいる様子が報道されている。そのうち、約十名は駿河台の正教神学校で日本語の研究に励み、一名が東京帝国大学医科大学に入学（一九〇六年入学のニコラス・アンドレーエフのこと）、<sup>4)</sup>その他は旅館に寄宿し、個人教授として雇った日本人に直接日本語を教わっているという。いずれも「粗食に甘んじ熱心に邦語に研鑽」しているとのことである。

これら明治末のロシア人留学生の中で最も知られているのが、日本文学者・日本文学者のセルゲイ・エリセーエフ（一八八九—一九七五）であろう。一八八九年一月十三日、帝政ロシアの富豪エリセーエフ家に生まれたセルゲイは、ベルリン大学を経て、一九〇八年、東京帝国大学国文学科に正規の課程で入学した。在学中には、夏目漱石の木曜会に参加するなど、日本文学者として研鑽を積み、優秀な成績で卒業した後、ロシアに帰国し、ペト

ログラード大学の講師に就任した。しかし、ロシア革命によって投獄され、釈放後はフィンランドを経て、フランスで亡命生活をおくった。ソルボンヌ大学で教鞭をとった後、第二次世界大戦後は、アメリカのハーバード大学に転じて、日本語・日本史・日本文学等の講座を担当し、エドウィン・O・ライシャワーやドナルド・キーンなど日本学・日本研究の先導者たちを育てている。彼は漱石門下の小宮豊隆や安倍能成、野上豊一郎、森田草平などの文学者・作家のみならず、国際法学者の田中耕太郎、経済学者の大内兵衛など、戦前戦後の日本をリードした多くの知識人の友人でもあった。エリセーエフについては、倉田保雄が詳細な評伝を刊行しており、倉田は彼を「日本学の始祖」もしくは「日本学の父」と位置づけている。<sup>6</sup> 倉田の評が示すように、エリセーエフは日本学および日本研究の歴史を検証する際に欠かすことが出来ない存在として、その名を残しているのである。

他方で、これら留学生たちの中に、日清・日露戦争を契機として訪日したロシア人や清国人とは全く別の理由によって日本を訪れた、たつた一人のアメリカ人青年がいたことはほとんど知られていない。この一人のアメリカ人青年の名はチャールズ・ジョナサン・アーネル (Charles Jonathan Arnell 一八八〇年七月一日—一九二四年十一月九日) といい、十代のうちにアメリカへ移住したスウェーデン系の移民であった。

アーネルは先述の東京帝国大学医科大学学生アンドレーエフと同年、エリセーエフの東京帝国大学文科大学入学に先駆けること二年、一九〇六年九月に、米国大使館に通訳官として勤務する傍ら、法政大学に入学している。日本の私立大学(ただし、当時の私立大学はすべて、一九〇三年に発令された「専門学校令」にもとづく「専門学校」である)に入学した最初の欧米出身者であり、その後、東京帝国大学に転じて、エリセーエフに続いて、欧米人としては東京帝国大学文学部国文学科(一九一九年、文科大学から文学部と改称)の二人目の卒業生となっている。<sup>7</sup>

しかしながら、「日本学の始祖」との評もあるエリセーエフと比して、アーネルの名は忘却の彼方にある。管見の限り、戦後、彼の名が記された文献として、アーネルの東京帝国大学国文学科における学友であった高木市之助による『国文学五〇年』(岩波書店、一九六七年)、同「島津久基とアーネル」(『折り折りの人第三』朝日新聞社、一九六七年。初出は『朝日新聞』一九六七年四月二十二日夕刊)、最初の入学校である法政大学の歴史を記した、霞五郎(≡神長謙五郎)『お濠に影をうつして 法政大学八十年史』(一九六一年)、同『法政大学 物語百年史』(一九八一年)、教員として勤務していた東京商科大学(現在の一橋大学)の『二橋大学学問史』(一九八六年)、そして、アーネルが来日するきっかけとなったタコマの日本人移民に関する大塚俊一(伊藤一男『続・北米百年桜』一九六九年)



写真1 チャールズ・ジョナサン・アーネル。『東京朝日新聞』1924年9月27日

所収)があるが、これらの文献のうち、アーネルの経歴に関して、ある程度まとまった記述があるのは、『一橋大学学問史』のみである。その他の文献は、いずれもアーネルに関する数少ない情報を伝えてくれる貴重なものではあるが、それぞれの著者の関心に限定された部分的な言及にとどまっているのである。

こうした文献の少なさにも象徴されるように、今日、アーネルはその存在が忘れられているが、それにはそれなりの理由がある。というのも、彼はわずか四十四歳という若さで急逝したため、東京帝国大学で研究を行っていた能や狂言、歌舞伎などの日本の伝統芸能・伝統演劇の研究を大成することができなかつたからである。彼は一冊の著作も残すことができず、その短い生涯を終えた。

一九二四年十一月、大学院に在籍し、博士論文の執筆に励んでいる最中、「排日移民法」の成立(一九二四年七月施行。同法の正式名称は、「一九二四年移民法 Immigration Act of 1924」)<sup>(8)</sup>に苦悩し、急逝したので

ある。<sup>(9)</sup>「排日移民法」は日米関係に深刻な遺恨を残し、多くの悲劇を生むこととなるが、アーネルの死はその悲劇の一つであった。

さて、本稿は、この忘れられたアメリカ人留学生であり、そして早世の日本学者であったアーネルの生涯を明らかにすることを目的として書かれたものである。それでは、今日、彼の生涯を辿ることになるが、ここでは、以下の四点を指摘しておきたい。

まず、第一は近代日本の留学生史に関わる。これまでの留学生史は圧倒的多数を占める清国留学生の研究が中心であった。これは量的な観点のみならず、彼ら清国留学生が辛亥革命などの中国近代史に果たした重要な役割と足跡を考慮すれば、至極当然のことであった。しかし、冒頭で記したロシア人や本稿で対象とするアーネルのようなアメリカ人など、明治末の日本には東アジア圏以外の様々な国から訪れた留学生が、少数ながらも存在していたのである。このことは事実のレベルにおいてもほとんど知られていないが、彼らなぜ明治末に日本に留学したのか、また帰国後に果たした役割はどのようなものであったのか、といった問いを、国別の差異や偏差も含めて検証する必要があると思われる。

第二は、日本学及び日本研究の歴史に関わる点である。残念ながら、彼の早世によって未完となつてしまつたが、彼が東京帝国大学で着手していた能、狂言などの伝統演劇の研究は、日本国内のアカ

デミツクな研究機関において、アメリカ人によってなされた最初期のものである。本稿では、筆者の力量不足のために紹介程度にとどまるが、外国人による学術的な日本研究の先駆けとして注目するに値する。

第三は、国文学史の領域に関係している。アーネルは東京帝国大学国文学科時代、高木市之助らその後の国文学界をリードする多くの人々と研究をともにしており、彼ら学友だけでなく、恩師であった国文学者藤村作（一八七五—一九五三）とも極めて親密な関係にあった。本稿では、昭和初期に大きな反響を呼んだ藤村の英語教育廃止論（英語科廃止論）に焦点をあて、アーネルの死が藤村に与えた影響についても考察した。

最後に、「越境史」の観点からである。根川幸男によれば、「越境史 [Transnational History] とは、「一國史や比較史に対する批判から起こった新しい歴史研究のパラダイムであり、複数国家・地域の関係・交差の視点から歴史を見直す方法」<sup>10)</sup>である。本稿はあくまで伝記的記述が中心となっているが、スウェーデンからアメリカへ、そしてアメリカから日本へと越境し続けたアーネルの生涯は、それ自体が一つの「越境史」としても捉えることができるだろう。

## 一 移民同士の出会い

チャールズ・ジョナサン・アーネルは一八八〇年七月一日、スウェーデンに生まれた。父ジョン、母アリダ、そして二人の妹とともに、十代のうちにアメリカ合衆国ワシントン州タコマ市に移住し、一八九九年、二十歳の折にはアメリカに帰化している<sup>11)</sup>。

スウェーデンからアメリカへの移民が増えたのは、一八八〇年代のことである。スウェーデンでは、一八一五年には、わずか二五〇万人に過ぎなかつた人口が、一九〇〇年までに五一〇万に急増しているが、その背景には、急激な死亡率の低下があつた。死亡率の低下はジャガイモの栽培が盛んになることよつて栄養状況が好転したこと、また、天然痘に対する予防接種が普及し、衛生状況も劇的に改善したことが原因であつた。他方で、農業国であるスウェーデンにおいては、エンクロージャー（まかな囲い込み）により、農業・農法の近代化と開墾も大規模化した<sup>12)</sup>が、そのような農地の効率化と拡張にも関わらず、急激な人口を賄うにはいならなかつた。農村には無職者があふれ、農村不況が発生した。それゆえ、多くのスウェーデン人はアメリカという新天地に向かうこととなる。スウェーデンでは、一八六五年から一九三〇年の間に、総人口の約四分の一が移民となり、とりわけ、ピークの一八八七年の移民者数は、

一年間に約四万七千人もの規模に及んだ<sup>12</sup>。そして、これらの移民の約九割は、アメリカへの移住者であり、アーネル一家がタコマに移住したのも、こうしたスウェーデンからアメリカへの大規模な移民の時代を背景としたものであった。

アーネルの生涯を決定づけることとなる日本への関心は、家族とともに移住した、このタコマの地で生じた。ここで、アーネルは日本人移民たちと出会ったのである。

彼が一九〇六年に法政大学へ入学した際に、同校の学内誌『法学志林』に掲載された記事によれば、当時、彼の父ジョンはタコマでバプテスト教会の伝道活動に関わっており、その布教の対象の中には、彼らスウェーデン人移民と同じく、アメリカへ移住して間もない日本人移民が多数含まれていたため、息子のアーネルも「自然日本人との交わり深」<sup>13</sup> くなっていったという。

タコマの地に日本人移民が入植を開始したのは、一八八五年頃のこと、アーネル一家がスウェーデンから移住した時期とほぼ同時期にあたる。この当時の日本人移民の急増もまたスウェーデンと似通った理由であった。一八八〇年代後半、西南の役の後、松方デフレ政策による不景気を起因とした、米価の低落、地租の重税に凶作が加わり、農村部は深刻な不況にあえいでいた。それゆえ、農村の無職者は、都市に流入することとなるが、当時の日本においては、都市産業はまだまだ発展の途上にあり、農村から流入する労働力を全

て吸収するにはいたらなかった。こうして、農村における余剰労働力の一部が北海道移住または海外への移住に回ったのである<sup>14</sup>。一方で、彼らの移住先のアメリカでは、一八六五年の南北戦争終結後の一八七〇年代から一八八〇年代にかけては、いわゆる「金びか時代」<sup>15</sup>とも、「第一次産業革命」<sup>16</sup>とも評されるほどの未曾有の経済的成長の過程にあった。急成長を遂げる中で、都市部であろうと農村部であろうと労働力の不足が深刻化しており、移民たちの労働力を求めていたのである<sup>17</sup>。

この間、ワシントン州の西北部に位置し、太平洋岸の港湾地にあるタコマは、世界中の移民が集まる湾岸都市として発展していき、一八九〇年頃には、百名を越える日本人が居住するにいたった。一八九一年にはタコマ日本人会が結成され、以後、日本人移民は漸次的に増加していった<sup>18</sup>。とりわけ、一九〇九年に大阪商船会社がタコマを米国航路の第一寄港港とし、日米貿易が進展したこともあり、日本人移民は九百名を超え、タコマの日本人社会は全盛期を迎えた<sup>19</sup>。先にアーネルの父ジョンがバプテストの伝道活動に関わっていたことに少し触れたが、タコマの日本人へのバプテストの伝道を開始したのは、「シアトルの日本人社会に基督教青年会を設けた元祖」<sup>20</sup>と称される岡崎福松牧師である。岡崎は、東京一致英和学校（明治学院の前身）を卒業後、一八八七年に渡米した日本人移民であった。渡米当初は各地を転々とするが、デンバー滞在中に、同地の第一バ

プテスト教会で受浸し、一八九四年には、シアトル第一バプテスト教会で按手礼を受けて伝道者として承認された<sup>19</sup>。以後、シアトルを中心に日本人移民への伝道に努め、一八九九年には、アメリカ西北部における日本人キリスト教会の第一号であるシアトル浸礼教会（バプテスト教会）を設立している。彼は伝道活動とともに、日本人移民への教育にも熱心であり、一八八九、一八九〇年頃から、移民たちに教育を施すために教会の一部を開放した宿泊所を設立し、多く人々が彼の世話になつてゐる。こうした岡崎の活動の功績は、日本人移民の誰しもが認めるところで、『在米闘士録』（一九三二年）の岡崎の項目には、「在米同胞中、シヤトル港に上陸し、暫く同地に足を停めて、奮闘した者ならば、大抵は岡崎氏の教会に止宿し氏の厄介にならぬものはないといつても敢て過当ではあるまい」として、彼を「海外に於る同胞精神界の明星」と称えている<sup>20</sup>。

その岡崎がシアトル近郊のタコマに伝道を開始したのは一八九三年ことで、岡崎の回想には、タコマへの伝道に際しては、同胞の牧師以外に、「同情者アーネル氏、ドクタームーア氏」の尽力があつたことが記されている<sup>21</sup>。すなわち、この回想にある「同情者アーネル氏」が、父ジョンのことであり、岡崎のタコマ伝道にはジョンの貢献があつたわけである。先述の『法志林』の記事に従えば、アーネルは父ジョンとともに岡崎ら日本人バプテストの伝道を手伝う中で、岡崎の周辺にいた日本人移民たちとも自然と親しくなつて

いった。極北の地スウェーデンから移住者であり、なおかつ多感な少年期をおくつていたアーネルにとつて、未知の存在である極東の日本人の言葉や文化、風俗など、彼を魅了するものであつたことは想像に難くない。

アーネルと日本人移民の交流に関しては、彼の母アリダの証言もある。アーネルの没後、アリダが日本に滞在中のアメリカ人の友人に宛てた書簡で記すところによれば、彼はタコマで日本人移民に英語を教えるなどの積極的な関わりをもつていたという<sup>22</sup>。例えば、後にタコマ日本人会の会長をつとめた川井徳平もその一人であつた。タコマの日本人移民の歴史を記した最も古い文献である、大塚俊一「タコマ日本人発展史」（一九一七年）には次のように書かれている。

現駐日米国大使館一等書記官アーネル氏は、駐日外交官中、最も日本語に長じ、歌舞音曲にすら通曉すと称せらるゝが、氏の日本語の手播きをなしたるものは、明治三十二年にはじめてパシフィック街にリンコン洋食店を開業せる川井徳平氏にして、互に日英語の交換教授をなしたるものなりと。川井氏は久しくタコマ日本人会々長として在留同胞の為に尽せる人、今は仲買媒介業に従事せり、春風秋雨二十年両者相会せば其の感概果して如何<sup>23</sup>。

同著は一九一七年に刊行されたもので、当時、アーネルは外交官として駐日米国大使館に在職していた<sup>24)</sup>。タコマにおける日本人移民の歴史を語る中に、このような一節が残されていることから、タコマの日本人移民にとつて、アーネルは親しい友であり、彼らの誇りであったことを窺い知ることができる。

アーネルと「日英語の交換教授」を行っていた日本人移民の川井は、山梨県東山梨郡日川村に生まれ、一八九四年にタコマに移住している。一八九六年にはサムナー市のホワイトウオレスカレッジに入学し、同校を優秀な成績で卒業した<sup>25)</sup>。初期の山梨県から移民は二十歳前後の青年が多かったが、川井もその一人であったのである。根川幸男は近現代日本人の移植民史の時期区分を試みているが、それにもとづくならば、川井は「黎明期」に特徴的な「苦学生」型の日本人移民であり、「西海岸の日本人移民の始祖集団」の一人であったといえる<sup>26)</sup>。川井はホワイトウオレスカレッジを卒業後、飲食業・仲買業など手広く展開し、親切な人柄から日本人移民のみならず白人との付き合いも多く、タコマの日本人社会の名士となつて<sup>28)</sup>いる。岡崎の回想によれば、川井は渡米当初、「国籍保存主義」者として知られており、キリスト教自体に反対していたとされる。しかし、後には、信徒にはならないまでも、賛同者の一人となり、

一九一七年十月に彼が没した際には、バプテスト教会の日本人牧師によつてキリスト教式の葬儀が行われたという<sup>29)</sup>。おそらく、アーネ

ル一家らと親しく交流する中で川井の思想も徐々に変化していったのであろう。

さて、このようなアーネル一家と日本人移民との関係性は、村川庸子が明らかにしようとしている、シアトル・タコマ周辺の日本人移民の「コスモポリタニズム」を象徴するものであろう<sup>30)</sup>。シアトル・タコマはアメリカにおける東洋貿易の拠点であり、日本との貿易を要因として発展していった都市であった。そのため、カリフォルニア州ほど排日運動が盛り上がることもなく、このことは異なる国から移住した移民間の良好な関係性を促進したのである。アーネルは五十三の諸語に通じているとの噂があつたほどで、もともとと言語への天賦の才に恵まれていたのであろうが、その卓越した日本語能力は、こうしたコスモポリットな環境のもとで、岡崎や川井ら日本人移民たちと親しく交流することによつて、磨かれていったのである。

## 二 法政大学入学と伝統演劇との出会い

アーネルはワシントン大学文学部を卒業後、外交官試験に合格した<sup>32)</sup>。彼が外交官を志した背景には、家族とともにスウェーデンから移住したタコマ及びシアトルでの経験が反映している。国際的な湾岸都市である同地でアーネルの家族と日本人移民たちが育んだ移民



間の幸福な関係性は、アメリカという多民族が共生する社会の理想を体现するものであり、国際社会においても、その可能性を追求する意義を与えるものであった。異なる国家と民族、人と人との架け橋となる外交官という仕事は、日本語を始めとした類まれな言語能力と異文化への優れた理解力をもつ、「越境者」アーネルにとつて、天職とも感じられるものであつただろう。

彼の外交官としての最初の赴任地はマニラであつたが、まもなく、東京の在日米国公使館に通訳官として着任している。そして、在日米国公使館着任後、彼の名が日本の新聞に登場することとなる。

一九〇六年九月、日本の私立大学（法政大学）に入学した初めての米国人学生として報道されたのである。「米国人の法政大学入学」と題された、一九〇六年九月二十三日付『東京朝日新聞』の記事がそれである（なお、一九〇六年一月、米国公使館は大使館へと昇格しており、この記事では、アーネルの肩書きも「米国外務通訳官」となっている）。

米国外務通訳官アーネル氏は今回梅博士の管理せらるゝ法政大学に入学し法制及び経済に関する学理を研究する筈なるが米国人の本邦大学は勿論私立大学に入学せるものは氏を以て嚆矢と為す

（「米国人の法政大学入学」『東京朝日新聞』一九〇六年九月二十三日）

本邦初の米国人学生のアーネルの入学に関して、入学先である法政大学の学内誌『法学志林』には、より詳細な記事が掲載された。

米国外務通訳官「シー、ゼー、アーネル」氏は大の日本好にて故国に在るの間常に日本語の研究に興味を有し来て我帝都に在るや其熟達せる日本語を縦横に活用して其趣味の満足を貪りつつありしか頃日大に法律研究の志を起し校友高橋敏太郎氏の紹介に依りて我法政大学に入るか「ア」氏は卒業後論文を提出して学士の称号を得るに非ずんば止まざるの決心なりと云ふ氏当に年二十五気鋭にして志壮なる前途有望の青年なり父は「ジャン、アール、アーネル」と曰ひて「マバプテイス〔原文ママ〕」教会に関係を有せるか該教会は邦人の出入多き為め自然日本人との交り深りしは「ア」氏が日本好の動機を為せりといふ故国に在るや「タコマ〔原文ママ〕」大学文学科に学卒業後馬尼刺政府の書記官と為り転じて駐在米国外務通訳官と為りて来朝遂に我大学に入るに至れり

欧米人士にして我私立大学に入れるもの実に氏を以て之の嚆矢となす

（「米国人アーネル氏の入学」『法学志林』一九〇六年十月）

『東京朝日新聞』の記事にもあるように、当時の法政大学は総理（現在の総長）であった法学者の梅謙次郎（一八六〇—一九一〇）のもと、法学及び政治学を中心とした私立大学として知られていた。<sup>(33)</sup> 明治期の知識人の多くがそうであったように、総理の梅自身がフランスのリヨン大学への留学生であったが、梅はとりわけ、「インターナショナル」なフランス法学者として知られており、清国留学生を対象とした清国留学生法政速成科を法政大学内に開設したのも、彼の主導によるものであった。<sup>(34)</sup> 昭和初期に刊行された法政大学の評判記の類には、「梅博士時代は単に国内の学生のみを相手にして居なかつた点に注目しなければならない」と書かれているが、これは清国留学生のみならず、米国人アーネルの入学にも当てはまるだろう。また、ここで引用した法政大学の学内誌『法学志林』は、梅自身が編集主幹を務めており、アーネルの入学にあたって、梅による庇護があつたことを窺い知ることができる。

『法学志林』の記事にあるように、アーネルに法政大学への入学を勧めたのは、高橋敏太郎であつたことも注目される。高橋は国民英学校および郁文館中学校で英語教師として勤務する傍ら、夜間に法政大学に通い、一九〇六年に法政大学を卒業している。卒業後は三井物産に入社し、得意の英語を活かして国際貿易に携わつていた。<sup>(36)</sup> アーネルと高橋の出会いがどのようになされたのか不明であるが、高橋は、十代のうちに受洗したメソジストとしても知られており、<sup>(37)</sup>

こうした経緯から両者に何らかの交流が生じていた可能性もあるだろう。高橋が自身の母校である法政大学をアーネルに紹介したのには、幾つかの理由が考えられる。一つは高橋自身がそうであつたように、当時の法政大学は夜学の法律（政治）専門学校であり、昼間に職業を持つものが通うには格好の学校であつたことである。また、外交官として働いていたアーネルにとって、外交官としての職務に直結する日本の法律・政治・経済を学ぶことができる点で、都合がよかつたのであろう。

しかしながら、法政大学の各種の卒業生名簿の中に、アーネルの名を見つけることはできない。霞五郎が『お濠に影をうつして法政大学八十年史』（一九六一年）や『法政大学 物語百年史』（一九八一年）の中で述べているように、彼が法政大学を卒業することはなかつたのである。<sup>(38)</sup> 法政大学を卒業しなかつた理由については、いくつか考えられるが、第一は外交官としての仕事である。入学から一年後の一九〇七年七月一日、アメリカが満州国安東県に設置した領事館に副領事として赴任することになつたため、<sup>(39)</sup> 日本での就学が不可能となつたのである。いま一つの理由は、その当時の法政大学の学風やカリキュラムが関係している。先述したように、当時の法政大学は夜学の法律専門学校であり、大半の学生は、昼間に職をもつ下級の官吏や軍人などであつた。法政大学の卒業生で俳人としても知られる白田亜浪（卯一郎）が記した『最近学校評

論』(一九〇六年)によるならば、夜学時代の法政大学の学生は、「多くは壮年思慮に富むの人にして、彼等は他に職業を有し、就中官吏に多くを見る。此等勞して糊口の資を作為し、余暇を以て修学せんとする篤志者」であつた。彼らはさらなるキャリアアップのため、高等文官試験などの国家試験の合格を目的として通つていたのである。その分、国家試験向けの実学的なカリキュラムが多く、学者肌のアーネルにとつては物足りないものであつたのかもしれない。しかし、それ以上に重要であるのは、来日後、彼が歌舞伎の観劇をきっかけとして日本の伝統芸能・伝統演劇の魅力に取り憑かれていつたことである。一九二二年十一月に『旬刊朝日』誌上に掲載されたアーネルの談話「日本の演劇と西洋のダンス」<sup>(4)</sup>では、彼が日本の伝統演劇に興味を持ったきっかけが、次のように語られている。

私が日本の演劇に初めて興味を持ったのは、以前、大使館に居た書記官のメイさんに連れられて帝劇に幸四郎や梅幸の出演した、「関の戸」を見た時に始まります。「関の戸」はドラマチックなものでしたが、演劇的趣味の他に所作の興味と、調子の非常に豊富なものであつた様に記憶して居ります。其次に矢張り帝劇で「勸進帳」を見ました、此時もメイさんと一緒に其の所作の雄大さに驚きました。殊にメイさんは以前、伊太利、仏

蘭西、独逸などに永らく居て音楽や踊りの好きな人でしたが此の「勸進帳」を観て、西洋のオペラに比して、少しも遜色の無いものだと思つて居ました。私も「関の戸」以上の演劇的価値のある物だと思ひ、これを観て一層深い興味を覚え、自身日本の踊りを稽古して見たい、と云ふ様な気が起つた訳です。

アーネルは米国大使館の同僚にたまたま連れられて行つた観劇によつて、歌舞伎に魅せられた。とりわけ、彼を魅了したのは西洋のダンスにはない「所作」であつた。後に彼が整理するところによれば、「西洋のダンス」は身体の美しさを表現することを目的としてゐるため、ダイナミックな動作が強調される。対して「日本の踊り」は「肩や手先の微細な技巧」を駆使することによつて、「自然」のシンボリズムを表現する。いわば、西洋のダンスは絵画的曲線美をみせるものであり、日本の踊りはそのような絵画的曲線美のほかに必ずシンボリックな要素が含まれているのである。例えば、「花の散るところ」、「水の流るゝところ」、「風が吹くところ」、「蝶々の飛ぶところ」といった自然の光景を、所作はその繊細な動作によつて表現する。そのような自然を背景にした所作(アーネルはこれを「シンボリック・ムーブメント」と評している)は、「日本の踊り」に独自のものであり、西洋人であるアーネルには極めて新鮮なものと映つた(彼によれば、歌舞伎はこのような「日本の踊り」を土

台として発展してきたものである)。この談話にもあるように、彼は自分でも踊りの稽古をしたいと、水木歌若（初代）に師事するが、年齢的に身体が固まつており、決して上達することはなかったという。しかし、そのことは、「日本の踊り」が幼少時からの長年の「仕込み」によつて、漸く成し遂げるものであることを知る機会となり、その奥深さに改めて感銘を受けている。

後に、アーネルは、「舞踊歌舞伎にかけては日本人も及ばぬ精通者」<sup>(42)</sup>、「歌舞伎狂」などと評されたが、歌舞伎にとどまらない、能、狂言などの日本の伝統演劇に関する探究の道はこうして始まつたのであつた。

### 三 東京帝国大学での日々

安東の領事館を経て、再び日本の地に舞い戻つたのは、約一年後の一九〇八年六月のことである。アーネルは安東県副領事から、在日米国外使館日本語書記官補に任命された<sup>(43)</sup>。翌一九〇九年にはミラー一等書記官の極東局長への昇進にともない、次席のアーネルは一等書記官に任命され、外交官としてのキャリアを順調に進んでいった。

その頃、日米関係は極めて微妙なバランスの上にあつた。日露戦争時、アメリカではロシアへの敵対心と、アメリカは日本を開国さ

せた「保護者」であるという意識から、日本へ同情的な視線を寄せる人が多かつた<sup>(44)</sup>。タコマにおいても「米人の日本人に対する好感情其の頂巔に達」し、「諸種の労働利益々多きを加へ、酒舗、ホテル、倶楽部等は競ふて同胞を用ゐる」、「黄金の雨降らんず勢」であつたといふ<sup>(45)</sup>。

しかし、日露戦争での予想もしなかつた日本の勝利は、日本は東アジアにおいて、アメリカの権益を脅かす対抗者ではないかという認識へと変化していった。こうした背景のもと、アメリカでも「黄禍論」が流布することとなり、カリフォルニア州では、一九〇六年に発生した「サンフランシスコ学童隔離事件」を契機として、日本人移民が「問題」として惹起されるにいたつた<sup>(46)</sup>。秦郁彦はこれらの出来事を「第一次日米危機」と呼び、蓑原俊洋は「排日運動の原点」と位置づけている<sup>(47)</sup>。

ただし、一九〇六年前後にカリフォルニア州議会に次々に提出された排日法案は、セオドア・ローズヴェルト大統領を中心とした連邦政府の働きかけによつて成立することはなかつた。まもなく、日米両国の外交的努力のもと、日本人移民の制限を両国が合意した日米紳士協定（一九〇七年十一月―一九〇八年二月）が締結され、日米関係はさしあたり小康状態にあつたといえる。この間、アーネルは様々な公務に従事しながらも、私生活においては、二十歳の日本人女性玉子と結婚し（一九〇八年）、玉子との間に二児をもうけている<sup>(48)</sup>。

アーネルが東京帝国大学国文学科に入学したのは、一九一三年のことであった。<sup>52</sup>一九一三年の文科大学の入学生は全部で四十四名。同年の入学生の中には、芥川龍之介（英文科）、久米正雄（英文科）、辰野隆（仏文科）、藤森成吉（独文科）、松浦嘉一（英文科）らがあり、国文学科の入学生には、終生の友となる島津久基（一八九一―一九四九。後に東京帝国大学教授。古代・中世文学）、三浦直介（一八八九―？。『白樺』同人）らがあった。<sup>53</sup>

欧米人であるアーネルの入学にあたっては、エリセーエフという先達がいたことが大きいだろう。一九〇八年に同大に入学したエリセーエフは四席という優秀な成績で卒業しており、このことは、アーネルの入学に際して好都合に働いたに違いない。この点に関して、先駆者であったエリセーエフの場合、非常な困難があった。彼は、ドイツに留学していた際にベルリン大学で偶然出会った言語学者の新村出に紹介状を貰っていたにも関わらず、文科大学長の坪井九馬三に殷懃無礼な態度で無理難題を吹っかけられ、ロシア語学者の八杉貞利や国語学者の上田万年の尽力によって漸く入学を果たしたのである。<sup>54</sup>なお、同時期にはアーネル以外にも、ロシア人のワシリー・メンデルリン（国文学科。国語学）やオ・ローゼンベルグ（哲学科。俱舎哲学）が東京帝国大学への入学を果たしている。<sup>55</sup>

また、当時の国文学科の教員には、上田のほかに、芳賀矢一、藤村作、保科孝一、佐々木信綱、吉岡郷甫、垣内松三らがあり、これ

らの教員のうち、近世国文学を専門とする芳賀や藤村とは公私共に親しく交わることとなる。

入学後、アーネルは、同じ国文学科の学生であった島津、三浦に、後に入学した高木市之助（一八八八―一九七四。後に京城帝国大学、九州帝国大学、日本大学の各大学教授）、沼澤龍雄（一八七九―一九四五。中世文学史）、宮崎晴美（一八九二―一九八四。後に駒沢大学教授）、平林治徳（一八八九―一九五九。後に学習院教授、大阪女子大学学長）らを加えて、「元六会」と称する親睦を兼ねた研究会を結成している。<sup>56</sup>高木の回想によれば、元六会はアーネルが創始者であり、彼を「主人」としたサロンとも言えるもので、「元六」とは、最初期のメンバーが六人（アーネル、島津、沼澤、三浦、高木、宮崎）であったことを「元六」にもじって、アーネルが名づけたものであった。月に一度開かれた元六会の会合は、「各自が自分の研究を持ちよりそれを話題に意見を交換するという仕組み」<sup>57</sup>で、主に勤務先の米国大使館の一室で開かれた。高木は官邸で出される料理の美味しさにも引かれながら足繁く通っていた。元六会の談話の中心は常に「主人」であるアーネルであり、しばしば恩師の芳賀や藤村を招きながら、機知に富んだ洒落で場を盛り上げたという。

一九一五年九月に開かれた元六会では、熊本の五高への赴任が決めた高木のために送別会が開かれた。その席で、離別への思いをこめて奏でられた島津の薩摩琵琶の音は、高木にとって生涯忘れら

れない思い出となった。どうやら、この時、アーネルは不在であったようだが、彼は「しよせんはこの人〔引用者注…アーネル〕が薩摩の殿様に琵琶を語らせたのだ」と回顧している。<sup>(60)</sup>

アーネルは元六会で友人や恩師たちと日本文学の様々な領域についての知見を深めながら、彼個人のテーマである能や狂言など日本の伝統演劇の研究に励んだ。先に大使館の同僚に連れられた観劇から彼が日本演劇に興味を持ったことは触れたが、その後、演劇界との付き合いも深まり、とりわけ、歌舞伎界においては、市川羽左衛門（十五代目）、松本幸四郎（七代目）、尾上梅幸（六代目）ら花形役者たちと極めて親密な関係にあった。例えば、恩師の芳賀は、歌舞伎座で上演された「平仮名盛衰記」に招待された際、アーネルに楽屋に連れて行かれ、幸四郎、梅幸、森律子らに「これは芳賀先生です」と紹介され、面をくらった思いをしている。この時、芳賀はアーネルに「一つ芝居の筋でも説明してやろうという心持あったが、開幕前にアーネルの筆による優れた英文の筋書きが配布され、驚くしかなかったという。<sup>(61)</sup>

歌舞伎界との密接な関係を物語るものとしては、幸四郎や梅幸の指導のもと、日活向島撮影所に交渉して、『積恋雪関扉』のフィルムを撮影したというエピソードもある。撮影では、「せめてこの美しい型衣装だけでも米国人にみせたい」と、アーネル自らが幸四郎の衣装を借り受けて、主役の相伴黒主に扮したという。同僚のアー



写真2 相伴黒主に扮したアーネル。『東京朝日新聞』1936年10月2日

ノルド書記官も出演し、米国の名士の間で上映したところ、大変な評判を呼んだとのことである。<sup>(62)</sup>

こうした現役の役者陣との交流でも深められた日本演劇研究の成果は、東京帝国大学国文学科の機関誌である『国語と国文学』に掲載された。『国語と国文学』は、文学研究室主任教授であった藤村の主導で一九二四年五月に創刊されたもので、今日においても国文学界を代表する研究誌として知られている。同誌の発刊の趣旨は、第一次大戦後の国文学の隆盛とともに、「天下同感の学者教育者に本誌を開放して、相共に斯学の研究、教授の進歩に尽くす所あらん」との方針のもとに、若い研究者たちに対して、その研究成果を発表する場を提供しようとするものであった。<sup>(63)</sup>

アーネルの日本演劇研究の成果である、*Brief Note on Comparison Between the No and the Greek Drama*（邦題は、「能と希臘劇の比較断片」。

以下、邦題で記す）が掲載されたのは、『国語と国文学』一九二四年七月号、すなわち第三号である。<sup>(63)</sup>

「能と希臘劇の比較断片」は、

- 一、能狂言と希臘悲劇との比較
- 二、能狂言と希臘喜劇との比較
- 三、能狂言とエリザベス時代の間劇

の全三部からなるもので、Brief Noteとされていることからわかるように、未だ覚書に等しいものである。

能とギリシャ劇を比較するのは、英語圏の能に関する言説として、当時、一般的に見られたものではあるが、「能と希臘劇の比較断片」に特徴的であるのは、両者の差異よりも「是等の類似点の変遷する環境の中にあつて、普通の法則〔英文は common laws〕が実行されることに寄与されなければならない」として、<sup>(64)</sup> 両者の共通性を見出すことを意図している点である。

例えば、そのような共通性を象徴するものが、「面」である。日本の能もギリシャ悲劇も「面」を使用するが、それはどちらも「超自然的な役」を表すためである。能もギリシャ悲劇も「半宗教的で且教訓的」であり、「神々や英雄たちの性格や行為」を表すことを主題としている。両者とも、その「面」は原始的ではあるが、とも

に奏でられる音楽や役者の荘重な動作とあいまって、「夢幻的神秘的」な雰囲気醸し出し、「笑と同じやうに涙が好きであつた当時の純粋な聴衆」に訴えたのである。

一方、狂言はギリシャ喜劇、とりわけ、サテュロス劇（原文では「サター歌」と際立つた類似性がある。狂言がしばしば謡曲中の人物を茶化すように、ギリシャ喜劇はしばしば悲劇の題材を「もぢつたもの」である。両者とも「可笑美（ユモラス）」、「あてつけ」によつて、当時の社会状態を風刺しつつ、人間の愚かさや弱点を指し示す。こうして、狂言もギリシャ喜劇も「劇に於ける非現実的な人物及生活から、現実的なものへの推移を標示」するものとして機能するのである。

さて、このような能・狂言に関する分析を、先述の「西洋のダンス」と「日本の踊り」の差異の分析と重ね合わせるならば、彼の問題意識が次のように抽出できる。すなわち、今日においては、「西洋のダンス」と「日本の踊り」は様々な点で差異をなす。しかし、「西洋のダンス」はその起源に遡るならば、そこには「日本の踊り」と共通の形態・要素を見出すことができる。それが西洋文明の源であるギリシャの劇である。西洋人であるアーネルが「日本の踊り」に心惹かれる所以は、その意味からすれば、彼が西洋人であるということではなく、人類に共通する「踊り」の根源が、日本の伝統演劇により色濃く遺されているからではないか、という問いに繋

がるのである。このような観点は、日本の伝統演劇を世界的な視野のもとに開くものであると同時に、「踊り」という人類に共通する文化を探究する視座を構築しようとする気宇壮大な試みであったといえるだろう。

以上、ここでは彼の東京帝国大学の日々を中心にみてきた。このようにアーネルは一見極めて社交的であり、華やかな演劇界との交流や外交官としての仕事も含めて、その生活も順風満帆であるかのように見える。しかし、恩師の藤村はそれとは違う彼の相貌を伝えている。アーネルは親しい藤村だけには、自分はこうした生活は好まない、大使館の仕事も望むものではない、としばしば吐露していたという。藤村は「アーネル君の性格は地味な方であつたようである」と観察している。<sup>66</sup>彼の日本の学友たちとの学生生活や演劇界を中心とした交流が充実したものであつたことは疑い得ない。しかし、彼はたつた一人のアメリカ人学生であつたことに注意する必要がある。

また、同じ藤村によれば、アーネルの願いは日本で学位を得た後、アメリカに帰国し、し、母校のワシントン大学で教鞭を取ることであつたという。この点に関して、学士号に関してエリセーエフという先達がいたが、日本人でさえ極めて難しかった博士号の取得（後述するように一九二三年にアーネルは大学院に入学している）については、前代未聞のことであつた。アーネルが死去した際には、

「排日移民法」とともに、「過度の勉強」も一因ではないかと噂されていたが、<sup>67</sup>次節で見ると、彼が異常をきたしながらも、博士号の取得を藤村に懇願していることを考慮すると、無視できない側面である。一見、華やかに見える生活の裏で、様々なかたちの精神的な抑圧が積み重なっていったのであろう。

#### 四 「排日移民法」の成立とアーネルの苦悩

アーネルはもともと「神経衰弱」の傾向があつたという。<sup>68</sup>一九一三年に東京帝国大学に入学していながら、卒業まで十年もの月日を費やしたのは、大使館での激務はもちろんのこと、一度、長期の入院生活に入ったためであつた。<sup>69</sup>それゆえ、一九一七年八月には、米国大使館も退職せざるをえなくなり、退職後は、一時的に神戸の商館に就職し、その後、彼自身の名を冠した「紐育アーネル合同会社」を設立している。<sup>70</sup>

長期の入院生活を経て、東京帝国大学に復学したのは、一九二一年のことであつた。復学から二年後、一九二三年三月に、アーネルは先述の日本演劇の研究で東京帝国大学を卒業し、翌月、大学院に入学した。<sup>71</sup>学部を卒業する約半年前の一九二二年九月には東京商科大学商学専門部及び予科の講師に就任し、英語（英会話）を担当することとなつた。<sup>72</sup>東京商科大学との関係は、一九二二年に同校の英



語奨励会が主催する演劇会において、東京外国語学校のメドレー博士とともに舞台監督にむかえられたことから始まった。<sup>25</sup> 講師就任後は、学生たちから温和な人格者として親しまれ、「おやじ」というニックネームまでつけられるほどであった。<sup>26</sup> 東京商科大学の学生新聞である『一橋新聞』には、当時のアーネルの様子が報じられているが、学生たちに近松の研究を披露し、その名調子に学生たちは目を見張ったという。<sup>27</sup> このように、大使館辞職後のアーネルは、幾つかの職を経て、漸く教壇に立ちながら博士号の取得を目指すという学究生活に入ることができたのである。

しかし、こうした学究生活の日々に、まもなく、突然の破綻が訪れることとなる。それは一九二四年七月のこと、すなわち、先述の「能と希臘劇との比較断片」が掲載された『国語と国文学』第三号が刊行された頃であると同時に、アメリカにおいて「排日移民法」が施行された時であった。

第一次世界大戦時、日本とアメリカは共に同盟国としてドイツと戦ったこともあり、日米友好の雰囲気醸成されるようになった。<sup>28</sup> 一九一七年十一月二日には、「石井・ランシング協定」がなされ、ドイツという共通の敵の前に、「両国で共同の宣言が行われたのである。しかし、終戦後に行われたパリ講和会議において、日本が終始自己利益を追求する方針をとったため、そのような親日ムードは一変していった。それとともに、カリフォルニア州では、一九〇六年

に発生した「サンフランシスコ学童隔離事件」以後、<sup>29</sup> 熾り続けた排日運動の熱が再燃することになる。<sup>30</sup>

一九一九年一月二十九日には、日米紳士協定の廃棄を綱領とする「カリフォルニア州排日協会」が結成され、翌一九二〇年十二月には、日本人移民の土地の制限を目的とした「第二次排日土地法」がカリフォルニア州法として成立した。一九二一年には、第一次大戦後のヨーロッパからの大量の移民の制限を目的とした「新移民法」が連邦議会で制定され、同法が失効をむかえる一九二四年六月を目標に、より厳格な修正移民法案が次々に提出されるようになった。<sup>31</sup> 下院では、排日を意図としたアルバート・ジョンソン議員の案が提出され、一九二四年四月十一日、ジョンソン案に基づいた移民法が可決された。一方、上院でも、同月十六日、デイヴィッド・リード議員による修正案が可決され、上下の両案をすり合わせるための両院議会が開催されることとなり、五月十五日、両院の投票によって可決された。五月二十六日、クルリッジ大統領が同法案に署名し、七月一日に施行されることが決定された。<sup>32</sup> 同法案は、「一九二四年移民法 (Immigration Act of 1924)」が正式な名称であるが、それが「排日移民法」と呼ばれるのは、「同法案」(「ジョンソン案」)には、帰化資格のない移民はアメリカから排斥されるとし、黄色人種は帰化資格のない移民とされていた。当時のアメリカの移民法において、まだ排斥されていない黄色人種は日本人だけであった<sup>33</sup> ことによる。

日本人を標的とした「排日移民法」の成立に対して、「日本の多くの国民はそれをアメリカ議会による恣意的な侮蔑であると受けとめ」た。<sup>(76)</sup>日本の新聞社は共同で抗議を行い、『国民新聞』の徳富蘇峰は、「排日移民法」の成立によつて、「日本国民は未曾有の侮辱を被つた」と憤慨し、同法が施行される七月一日を「国辱の日」と命名すべきであると主張した。親米派として知られる新渡戸稲造さえも、「実にけしからん、アメリカのために惜しむ。僕はこの法律が撤回されないかぎり、断じてアメリカの土は踏まない」と誓つたという。これらの言説を詳細に検証した養原は、この当時の日本の世論は「感情的になる傾向が顕著だつた」と総括している。<sup>(80)</sup>

このように「排日移民法」をめぐる日本世論が湧き立つ中、アーネルは一人煩悶し、眠れない日々を過ごしていた。当時のアーネルの様子を、妻玉子は次のように回想している。

日米問題が起つた時分なども、男ですからさう愚痴は言ひませんが、側のものがハラハラするほど懊悩してをりました。

(中略)七月頃になつて、一寸変だと思ふやうになりました。けれどもさうしたう言みたいなやうなものは、大抵日米問題が関係したことで、陛下だとか米國議会がどうしたとか、一人で興奮をしてをるのでした。<sup>(81)</sup>

アーネルの異変に気づいていたのは、家族の玉子だけではない。アーネルの師であつた藤村はその鋭敏な観察眼をもつて、アーネルが異常をきたす様子を伝えている。<sup>(82)</sup>

七月六日のこと、藤村の家にアーネルが長男を伴つて来訪した。出迎えた藤村に対して、開口一番、「先生を大金持ちにしてあげます」としきりにまくし立てたという。藤村ら帝大教授を「大金持ち」にするというのはどういふことか。アーネルは日本政府が大学の教授陣を薄給にしておくのは文化的観点から大きな間違いであるとして、彼が新たに設立するレストランの株主に帝大の教授陣がなつてくれさえすれば、必ず彼らを「大金持ち」にしてみせると、奇想天外なレストラン構想を語り始めた。そのレストランは、「極楽」と「地獄」の二つに分かれており、「極楽」ではアーネルが考案したという菜食を中心とした人間にとつて理想的な料理を、天女の格好をした給仕と静かな音楽の中で味わう。一方、「地獄」では、壁から炎が噴出する真っ赤な壁に囲まれ、耳を劈くような音楽が流れるなか、槍を持ち、鬼の格好をした給仕に監視されながら、肉と酒を食するのだ、という。

藤村はこのようなアーネルの夢想的なレストランの話が、戯言なのかそれとも真面目な話なのかと戸惑いながらも、藤村が酒を嗜むことはアーネルも承知しているはずであるから、「わたしは地獄組ですね」と冗談めかして、茶々を入れてみる。しかし、アーネルか

らは何の反応もなく、「東京中、日本中からお客が集まります。会社は大儲かりです。」と、滔々<sup>とた</sup>と、かつ真面目に語り始めた。藤村はアーネルの様子が明らかにおかしいことに気づく。

台所では、動物の声色をまねて、藤村と藤村夫人を驚かせ、別室ではたまたま居合わせた客人と子供たちがアーネルの様子がおかしいと首を傾げている。結局、深夜までアーネルは一人で騒ぎ続けた。藤村と藤村夫人はもう一人の来客者とともに、彼の昂揚した様子に辟易しながらも、「例の神経衰弱が高じたのぢやないかね」と頻りに心配し合っていたという。

約一週間後の十二日夜半、今度は玉子と二人の子供を連れて再訪した。席につくやいなや、柳行李から石鹼や売薬、化粧品などを取り出して、「これもあげます」「これもあげます」と、矢継ぎ早に贈り物をしてくる。藤村は玉子に「少し亢奮してゐらつしやるやうですぬ」と耳打ちし、アーネルを刺激しないよう、彼の申し出を一つ一つ受けた。贈り物が終わると、「先生と一緒に食事をしようと思つて」と、またしても柳行李から次々と食料を取り出し、自分で発明したという「フスマの麵包」や乾葡萄と落花生を主食とした独特の料理を振る舞った。

食事が終わると、アーネルは藤村にしばらくアメリカに帰国すると打ち明けた。アーネル曰く、帰国の目的は、日米問題にあるという。すなわち、排日移民法の制定は、全くアメリカ政府の「過つた

処置」であるから、帰国して、諸方に演説をしてまわり、国論を喚起しよう思う、とのことであつた。藤村は彼の日本への好意と正義感に心をうたれるとともに、最近の興奮した様子は、日米問題に起因すると思ひ至り、心が痛んだ。そのうち、アーネルは藤村に博士号の取得について懇請し始める。

それに就いて先生に御相談があります。私は日米両国のために帰国するのですが、私が単に日本の大学を卒業したといふだけでは十分の信用が得られません。広く演説して回るには、日本の博士の学位が欲しいと思ひます。私は大学院にゐてまだ研究は纏まりませんが、どうか、この事を先生から大学総長に話して特別に学位を貰うて下さい。

藤村はこの申し出に大いに困惑し、博士号の取得は厳密に学位令に基づくゆえ、極めて困難であることを説明したが、納得しない。困り果てた藤村はアーネルをこれ以上興奮させてはいけないと、その場ののぎに、明日、総長に相談すると約束してしまつた。すると、「きつと出来ます。斯ういふ特別な場合ですから」と非常に喜んだ様子であつたという。

そうこうするうち、アーネルは藤村にもアメリカへの同行を求めてきた。偶然、高木市之助が来訪したため、藤村は高木に話をふる

も、高木はアメリカへは秋の船で行く予定だからと譲らない。アーネルは非常に不満な様子であったが、突然、親友の沼澤龍雄のことを思い出し、「それでは、沼澤さんに一緒に行つて貰はう。さう／＼沼澤さん、沼澤さん、沼澤さんなら大丈夫だ」と一人で納得して、例の声色ではしゃぎだした。この日、結局、アーネルと彼の家族が帰宅したのは午前一時であった。

翌日、藤村は、彼の病状を慮つたとはいえ、その場しのぎの口約束をしてしまったことに良心の呵責を覚えながらも、なんとかアーネルを宥めようと、急いで手紙を書いた。君の好意は日本人として実に感謝に堪えない、ただ、総長にも相談したが、日本の学位令は非常に厳格で、君の希望に添うことは難しい。しかしながら、君は遠からず博士号を得られるはずだから、アメリカではそのように伝えればいいのではないかと。「総長にも相談した」というのは嘘であった。それはもとより無理な話であったのだから。藤村は玉子にも彼の様子を心配する手紙を書き、同僚の宗教学者姉崎正治（嘲風）らと甲府への出張に向かった。

十四日、甲府の出張から帰宅すると、昨夜もアーネル夫妻が訪れ、藤村夫人を相手に、日本の学位の窮屈さをしきりに非難していたという。玉子はアーネルの様子が日増しに悪くなつていき、興奮の度合いが尋常ではないことを藤村夫人に伝えている。

翌十五日、今度はアーネルの親友である沼澤が一人で藤村のもと

へ訪れ、アーネルの症状が日増しに悪化していくため、友人たちで協議をして、築地のセントルカ病院（聖路加病院）に入院させたという。しかし、セントルカ病院では治療できる設備がないため、青山脳病院に転院させたところ、すぐに面会謝絶になつてしまったとこのことであつた。数日して、アーネルの帰国が決まったとの報が藤村のもとに届いた。急遽、米国大使館の便宜で船室を与えられることが決まり、七月二十三日、帰国の途につくことになつたのである。七月二十三日、高木と沼澤はアーネルを見送るため、船室に向かったが、そこにはやつれ果てた姿のアーネルが一人待つていた。面談の際、高木は「琵琶を聞いたあの夜とは全く違つた涙」を流さずにいられなかつたという。この時、アーネルは誰が見ても回復の見込みがないほど病状が悪化しており、もはや絶望的な状態だったのである。見送りに行くことができなかった藤村は、アーネルを乗せた船が、海上を穏やかに進行していることを願いながら、帰国後は故郷の母のもとで心静かに療養し、奇跡的な回復を遂げることを祈るしかなかつた。

## 五 アーネルの死と遺されたものたち

アーネルの帰国は、「排日を憂いて 米人教授発狂」と題されて『東京朝日新聞』（一九二四年九月二十七日）に大々的に報道された。

同紙の報道を受けて、アーネルが教鞭をとっていた東京商科大学では、彼に教えをうけた商学専門部の学生たちが義捐金の募集を呼びかけている。

われらの旧師アーネル先生は発狂されました、そして只今先生は、ワシントンの州立脳病治療院で淋しく暮らして居られます。先生は蓄財がないために愛する玉子夫人や二人の愛児の看護を受くることも出来ず、知らぬ中に日本を去り、知らぬ中に治療院に影ばかりの生活を初められたのです。何と云ふ悲しいこと  
でせう。吾等は先生が日本を愛されたことを知って居りました、併し先生が今度の日米問題に就いて煩悶の末発狂せらるゝまで日本を愛して下さつたことは知りませんでした

心なくして先生に単に米国人なるが故に、白眼を向けた人こそ  
慚謝すべきでありませう

先生を思う諸兄よ。応分の寄付をしてください。それは物質的に望み少き先生に捧げられるのです。(略)

商学専門部有志<sup>85)</sup>

彼ら東京商科大学の学生たちの善意は疑うことはできないが、この呼びかけに記されているように、「排日移民法」成立前後の反米感情の高まりの中で、勤務校である東京商科大学においても、アメ

リカ人である彼を白眼視するような傾向があつたのである。商学を中心としていることから英語教育が盛んであり、リベラルな校風を誇っていた同校でもこのような事態があつたとするならば、他は推して知るべしだろう。

「排日移民法」の成立に、最も苦悩していた一人がアーネルであつたことは疑い得ない。本稿で述べたように、アーネルの日本への関心は、移住先のアメリカ、タコマでの日本人移民との交流から始まつた。そして、彼らとの交流はアーネルのその後の生を方向づけたのである。同法が標的とする日本人移民たちは、彼の生涯を方向づけた人々であり、少年時代からの彼の友人たちであつた。

アーネルは大使館に勤務していたころにも、排日問題に取り組んでいる。例えば、一九一三年にカリフォルニア州議会で「カリフォルニア州外国人土地法」が可決された際には、「排日問題の醸生する畢竟日米両国人の意思の疎通を欠くあり」との見地から、大日本平和協会と日米平和協会の共同事業の一環として、阪谷芳郎(二八六、三一―一九四一。大蔵大臣、専修大学学長等を歴任)らと外国人向けの日本語学校の設立に参画し、日米間の融和に努めている。神田錦町に設立された同校では、米国人を中心として、老若男女百名ほどの留学生が熱心に日本語を学んでいたという。<sup>87)</sup>

一九一七年四月に発足した日米協会の発起人にもアーネルは名を連ねている。<sup>88)</sup> 日米協会が設立された背景には、カリフォルニアにお

ける排日問題があり、日本側からは「知米派の政府関係者や実業家、学者」たちが、米国側からは「日本に在住する米国人の外交団、実業家、教育・文化関係者、宣教師」たちが参集し、「両国の親善と日米間の懸案となった移民問題の解決」を図ることが目標として掲げられていた<sup>91</sup>。同会の設立に最も熱心であったのが、アーネルの上司であったガスリー (George W. Guthrie) 駐日大使である。ガスリーは、「フリーメーソンの会員としてペンシルバニア・メーンソンのグランドマスターという大役を務めており、人と人との交流の重要性を理解できる人物」であった。彼はカリフォルニアの排日運動にも極めて批判的<sup>91</sup>で、排日問題の解決のためには日米両国の広範な人々がより緊密に交流する必要性を痛感しており、アーネルもまたガスリーと志を同じくしていたのである。残念ながら、ガスリーは同年三月八日、日米協会の設立を待たずに駒沢のゴルフ場で競技中に急逝するが、その遺体を祖国まで送り届けたのもアーネルであった<sup>92</sup>。

なお、大倉喜八郎 (一九三七—一九二八。大倉財閥の創業者で、大倉商業学校の創立者) や渋沢栄一 (一八四〇—一九三二) ら財界人との親交が生じたのもこれらの事業に関わっていた頃であつただろう<sup>93</sup>。

これらの事業に加えて、一九一四年に、駐日アメリカ特命全権大使ラーツ・アンダーソンの妻イザベル・アンダーソン (二八七六一—一九四八。作家、ボストンの富豪としても知られる) が刊行した *The Spell of Japan* への協力も注目される<sup>94</sup>。 *The Spell of Japan* は英語圏の読

者に向けて、イザベルの滞日中の生活をもとに、日本の歴史や文化、風俗、娯楽などを幅広く解説したもので、同著の中で、イザベルが最大限の感謝を述べているように、彼女のために、歌舞伎やアイヌ民族の文化などを紹介したのがアーネルであった<sup>95</sup>。

大使館に勤務していた頃のアーネルは、書記官という立場上、直接的に排日問題への考えを公にすることはなかったが、こうした地道な活動を積み重ねていくことよって、日米間の相互理解を深め、両国の懸隔を埋めることに努めていたのである。

しかし、東京商科大学の学生たちの呼びかけが行われてから間もなく、彼はワシントン州立脳病院で死去した。帰国から約三ヶ月半後、一九二四年十一月九日のことであつた<sup>96</sup>。

アーネルの死に最も衝撃を受けていたのは、まだ大学院生として在籍していた東京帝国大学国文学科の友人と恩師たちであつた。沼澤とともに帰国を見送った高木は、アーネルの死によつて、彼ら若き学究たちの青春の舞台であつた元六会が終焉を遂げたことを、そして、これからは個々の道を歩まざるを得なくなつたことを悟つた<sup>97</sup>。アーネルへ二度の嘘をついたことに後悔の念に駆られていた藤村は、せめて、「君が我が国に寄せられた好意を了解してくださいる人を一人でも得たい」と、『国語と国文学』に長文の追悼文「アーネル君を憶ふ」をしたためた<sup>98</sup>。掲載号は、一九二四年十一月号、アーネルの「能と希臘劇との比較断片」の掲載からわずか四ヶ月後のこ

とであった。一九二四年五月に創刊された『国語と国文学』は、創刊からわずか半年のうちに、その重要な書き手を失ったのである。

アーネルと藤村との出会いは、藤村が東京帝国国文学科の助教に就任して間もないころ、彼の講義にアーネルが出席したことから始まった。いまだ三十代の少壮気鋭の学者の眼には、日本人学生に混じって、日本の演劇の魅力を熱心に語るアメリカ人学生の姿は新鮮に映ったことだろう。その後、アーネルが主催する元六会に度々招待され、観劇にも連れ立って行くようになり、次第に両者はその仲を深めていった。藤村とアーネルの年齢差はアーネルの方が五歳年下であり、男兄弟のいなかったアーネルからすれば、藤村は兄のように慕い、そして頼れる存在であった。この点に関して、元六会の面々は一歳年上の沼澤を除けば、いずれも十歳近く年少であり、彼らの中にいるとき、アーネルは年長者として振る舞わなければならなかったのである。八歳年下の高木がアーネルを元六会の「主人」と評するのは、年少者に囲まれるなかで、アーネルがそのような役割を自覚的に担ったがゆえである。アーネルがしばしば藤村だけに悩みを打ち明け、真情を吐露していたことに注意しなければならぬ。

藤村にとつてもアーネルは国文学の研究を共にする尊敬すべき同志であり、得がたい友人であった。藤村は毎年正月三日には、自宅で客人に囲まれて過ごすことを年に一度の楽しみとしていたが、

その席に決して欠かすことができない客人がアーネルであった。座敷で食事をともにし、数の子を美味しそうに食べるアーネルをみて、藤村夫人は喜び、狭い座敷に春が訪れたかのような談笑の花が咲いた。その合間には、アーネルお得意の勸進帳の物真似や白波五人男を演じて、皆を楽しませた。藤村の愛する家族と最愛の弟子たちとともに笑い合いながら新年を迎える幸福な瞬間であった。しかし、アーネルの死によつて「斯うしたことも今は悲しい思い出」となつてしまった。そして、なによりもアーネルが長期にわたつて、身を犠牲にしながら取り組んでいた日本演劇の研究がついに遂げられなかったことが悔やまれた。「誠に痛ましくも亦惜しいことである」「返すく遺憾である」「天の幸することの薄きをつくづく歎じたくなる」と、藤村は繰り返す。せめてもの手向けは、アーネルが『国語と国文学』に掲載した論文「能と希臘劇との比較断片」の存在を読者に知らしめることだけであった。

ところで、藤村の追悼を読み進めたとき、彼が一九二七年以降に発表し、大きな反響を呼んだ一連の英語教育廃止論（英語科廃止の急務）『現代』一九二七年五月号、「英語科処分の論争について」同誌一九二七年十月号、「中学校英語科全廃論」『文芸春秋』一九三八年<sup>29</sup>）をどのように受けとめるべきかという問いが生じざるを得ない。

「模倣の時代は過ぎた」という宣言からはじまり、一般の日本人には労力の面からも生活上の必要性の観点からも英語学習・外国語

学習は不要であり、早急に英語教育を廃止して、その分を「国民特有の精神」「国民的自覚自尊」を促すことに傾注すべきである、と主張する藤村の英語教育廃止論は、一見、彼を反米ナシヨナリストとして解釈させるものである。しかしながら、藤村とアーネルの交誼とその結末を知る者からすれば、事態はより複雑である。例えば、「英語科処分論争について」の中に、不意に挿まれた次のような文章に注意する必要がある。

世界の多くの民族が建ててゐる国家の境界を亡くして、四海は同胞であり、あらゆる人類は平等であらねばならぬという考へは結構な考へであります。此の考を地球上に実行しようとするのが人道主義の理想でありませうけれども、人類進化の今日程度に於いては、かゝる考へは一場の香夢にすぎませぬ<sup>100</sup>

ここから伝わってくるのは、民族主義的な熱狂ではなく、国家・民族間の関係性に関する藤村の諦念と絶望である。「人類進化の今日程度」、すなわち、アーネルの死のきつかけとなつた「排日移民法」に象徴されるような民族間の憎悪があらわな今日においては、異民族間の交流は、両者の属する国家や民族の関係と状況によつて規定されてしまい、最終的には、苦惱——藤村とアーネルのような——しか生み出さない。それならば、最初から、徒に外国語を学ば

せ、外国及び外国人への興味を持たせるようなことはすべきではない、と藤村は訴えているかのようである。

藤村とアーネルの中に確かに存在した交誼は、「一場の香夢」であつたのだろうか。藤村はアーネルへの追悼文を次のように締めくくっている。

アーネル君の如き人の存在は独り米国の為め、日本の為、両国の親善の為に必要なばかりでなく、世界人類の幸福の為に必要な筈である。私は独り友人を失つた悲しみを感ずるばかりでなく、君の長逝によつて世界の損失を感ずるのである。<sup>101</sup>

藤村がアーネルの死によつて感じた「世界の損失」とは、「世界」にとつての損失であるのみならず、藤村にとつて「世界」そのものが失われるに等しいことであつたのではないだろうか。

おわりに

アーネルは「日本の新古の劇を英語に直して世界に知らせたい」という望みを持っていた。そして、日本で博士号を取得し、母校のワシントン大学で教鞭を取りたい、と。

芳賀によると、彼のワシントン大学でのポストは、日本で博士の



学位を得さえすれば、約束されたものであったという。<sup>103</sup>確かに、ワシントン大学では、一九〇九年に東洋学学部 (Department of Oriental Studies) が設立されており、アメリカにおけるアジア研究機関の拠点として歩み始めたばかりであった。<sup>104</sup>二十年もの期間を日本で過ごし、たった一人のアメリカ人学生として研鑽を積んだアーネルであれば、当然のことであつただろう。だが、彼は死の直前、日本人との出会いの場であり、母アリダと妹が待つタコマに帰ることはできなかったが、母校の教壇に立つという夢はかなうことなく、四十四年の短い生涯を終えた。

アーネルの葬儀には、彼がタコマで生活をしていた際に、英語を教えていた日本人たちも駆けつけたという。母アリダは先述の書簡の中で、その時の様子を「あの子は恰も自身がお友達の間に交つてゐることを知つてゐるやうに、その笑顔は自然で、その頬はありし日のまゝでした」と記している。<sup>105</sup>アーネルと友人たちは、生前も、そして死後も、日米の懸隔を超越したところで、自然な笑顔を浮かべることができると関係にあつたのである。

アーネルが十代前半という多感な時期に極北の地から移住することになったのは、世界中から様々な夢をもって移住した移民たちのダイナミズムによつて形成された「移民国家」アメリカであつた。同時期、極東の地から訪れた移民たちが、偶然に同じ地に住みつき、出会うことによつて、彼のその後の人生は方向づけられた。巨視的

にみれば、このような偶然的な出会いには、一九世紀末の「近代世界システム」(イマニュエル・ウォーラーステイン)の展開を背景とした大量の人的移動の産物であり、「移民の世紀」を物語るものでもあつた。<sup>106</sup>そして、その死もまた「移民」という存在が刻印されている。「排日移民法」の成立は、彼と日本人との出会いの場であつた、ほかならぬアメリカという国家、彼が外交官として忠誠を尽くした国家が、彼の生そのものを否定するものだったのである。

もちろん、彼の死を排日移民法の成立のみにひきつけて解釈することには問題がある。先述したように、彼はそれ以前から心身ともに長期的な疾患を抱えていたのであるし、「排日移民法」にひきつけたアーネルの死についての解釈は、「排日移民法」を批判する日本の新聞メディアにとつて、格好の「材料」であつたこともまた事実である。<sup>107</sup>しかしながら、周囲の日本人たちが証言するように、それが死への一つのトリガーとして機能したこともまた疑い得ない。

アーネルの生涯は、十九世紀末から二十世紀初頭の「移民の世紀」において、スウェーデンからアメリカ、そしてアメリカから日本へと越境しつづけた越境者の喜びと苦悩の軌跡として、そして、喜劇的結末に至らなかつた悲喜劇として記憶されなければならない。

付記…本稿の執筆にあたり、海外移住資料館、一橋大学学園史資料室には資料に関するご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。なお、本稿

においては、固有名を除いて、旧字体を新字体に改めました。

注

- (1) さねとうけいしゅう『増補版 中国人日本留学史』くろしお出版、一九八一年、五九一―六二頁。さねとう以降、清国留学生については、多くの研究が重ねられてきたが、最良の成果は、山室信一『思想課題としてのアジア―基軸・連鎖・投企』(岩波書店、二〇〇一年)であろう。
- (2) 「露人我が大学に入らんとす」『東京朝日新聞』一九〇六年四月九日。少し後になるが、大正六年二月十日付『東京朝日新聞』掲載の「本邦留学の外人」には、文部省の統計調査をもとに、当時の外国人留学生数が以下のように報告されている。

- ▲帝国大学(東京、京都、東北、九州) △支那人百二十一人、△露国人四人、△米国人一人
- ▲高等師範学校支那人男子八十三人女子十人
- ▲高等学校(自第一至第八) 支那人百九十四人
- ▲医学専門学校支那人十九人
- ▲高等工業学校△支那人百六十九人△印度人五人△比律賓人二人
- ▲高等商業学校支那人三十七人
- ▲其他の専門学校支那人三十二人 合計七百七十七人

ここから分かるように、留学生の圧倒的多数は中国からの留学生であったが、少数ながらも、ロシア、インド、フィリピン、アメリカなどから訪日した留学生が存在していたことは忘れてはならない。この報告にある帝国大学の「米国人一名」が本稿で対象とするアーネルである。

- (3) 山室、前掲書、三一―三五〇頁。この点に関しては、清国の留日政策を主導した張之洞の『勸学篇』(一八九八年。最新の訳は、濱久雄・那智安敬訳『勸学篇(中国古典新書統編)』明德出版社、二〇〇六年)も参照されたい。

- (4) 「露人の邦語研究」『東京朝日新聞』一九〇六年十二月十八日。
- (5) アンドレーエフの名は、『東京帝国大学一覽 従明治三十九年 至明治四十年』(学生生徒姓名) 五五頁(医科大学学生及生徒 第一学年)に見出すことができる。
- (6) 倉田保雄「エリセーエフの生涯―日本学の始祖」中公新書、一九七七年。同「夏目漱石とジャパノロジー伝説―「日本学の父」は門下のロシア人・エリセーエフ」近代文芸社、二〇〇七年。
- (7) 藤村作「アーネル君を憶ふ」『国語と国文学』一九二五年一月号、一一―四頁、芳賀矢一「アーネルさん」『国語と国文学』一九二五年二月号、九三頁。
- (8) 「一九二四年移民法 Immigration Act of 1924」(またはジョンソン・リード法 Johnson-Read Act) が、日本で「排日移民法」と呼ばれるのは、日本人移民を排斥する、いわゆる「排日条項」(第十三条C項) が法文中に含まれていたためである(養原俊洋『排日移民法と日米関係』岩波書店、二〇〇二年、六九―七〇頁)。すなわち、同条項でアメリカへの入国を禁止された「帰化資格ない外国人」とは、「東洋人で唯一いまだ米国の移民法によって排斥されていなかった日本人移民」を意味していたのである(同右、一一―九頁)。
- (9) 高木市之助はアーネルの死を次のように嘆じている。「アーネルさんは後に突如として健康を害し、小泉八雲を想わせるような夫人を日本に遣して帰国後数週間?で歌舞伎その他の日本文化についての造詣を業績にすることなしに長逝してしまった」(高木市之助「折り折りの人 薩摩の殿さま 島津久基とアーネル」『朝日新聞』一九六七年四月二日夕刊)。
- (10) 根川幸男「近現代日本人の海外体験と日系移民史の時期区分」根川幸男・井上章一編『越境と連動の日系移民教育史』ミネルヴァ書房、

- 二〇一六年、八頁。
- (11) 一橋大学学園史編集委員会編『一橋大学学問史』一九八六年、一一〇—一一一—四頁。また、Herringshaw's American Blue Book of Biography (Chicago: American Publishers' Association, 1914, p.33) も参照された。二人の妹の存在は、津彌子「日米問題に狂死したアーネル氏の遺族を訪ふ記」『主婦の友』第九巻第二号（一九二五年二月）に記されている。同記事の筆者である津彌子については不詳であるが、一九二三年から一九二五年までの期間、『主婦の友』誌上でいくつかの記事を執筆している。
- (12) スウェーデン移民については、さしあたり、I・アンデション＝J・ヴェイブル・潮見憲三郎訳『スウェーデンの歴史』（文眞堂、一九八九年、三七—三八頁）、ナンシー・グリーン・明石紀雄監修『多民族国家アメリカ』（創元社、一九九七年、六三—六四頁）を参照された。
- (13) 「米国人「アーネル」氏の入学」『法学志林』一九〇六年十月号（法政大法学志林協会編）。
- (14) 飯野正子『もう一つの日米関係史——紛争と強調のなかの日系アメリカ人』有斐閣、二〇〇〇年、一三一—一七頁。
- (15) 当時のアメリカの状況に関しては、ハーバート・G・ガットマン『金びか時代のアメリカ』（大下尚一訳、平凡社、一九八六年）、有賀夏紀『アメリカの二〇世紀（上）1890年～1945年』（中公新書、二〇〇二年）等を参照されたい。なお、世界システム論に従うならば、このような世界的な人的移動は、一九世紀末における「近代世界システム」の全地球的な展開によるものである。すなわち、全地球的な「近代世界システム」の展開過程においては、「中核」部が工業化の局面に至り、世界システム内での労働力の配置転換が行われた。「中核」国（後にヘゲモニー国家）へとのし上がる過程にあつたアメリカでは、「周辺」「半周辺」の諸国家から、高い賃金と生活水準を求めて多くの移民が集まることとなり、「移民の世紀」が現出した。こうして、極北のスウェーデン人移民と、極東の日本人移民が
- 海を越えて出会うこととなつたのである（川北稔『世界システム論講義——ヨーロッパと近代世界』ちくま学芸文庫、二〇一六年、一九七—二〇二頁が簡にして要を得ている）。
- (16) タコマ日本人会編『タコマ紹介』一九二二年、八八—九二頁。
- (17) 村川庸子「日本人移民の「コスモポリタニズム」——二〇世紀初頭のタコマ近郊の愛媛県人農業コミュニティを事例に」『総合地域研究』第五号（敬愛大学総合地域研究所編、二〇一五年三月）。
- (18) 竹内幸次郎『米国西北部日本移民史』大北日報社、一九二九年、七八—一頁。
- (19) 伊藤一男『北米百年校』PMC出版、一九八四年、竹内、前掲書『米国西北部日本移民史』、七五〇、七七九頁。
- (20) 中川無象「在米闘士録」（博文堂書店、一九三三年）、奥泉栄三郎監修『初期在北米日本人の記録 北米編 第十五冊』所収、文生書院、二〇〇三年、五七五頁。
- (21) 竹内、前掲書『米国西北部日本移民史』、四五—一頁。ただし、父ジョンの経歴についてはほとんど判っていない。ジョンについて記した数少ない文献である、R. E. Magden, *Furnace: Tacoma-Pierce County Japanese 1880-1977*. Tacoma: Tacoma Longshore Book & Research Committee, 1998, pp. 10-11によれば、ジョンは当地のバプテスト教会のリーダーであつたことであるが、岡崎がジョンのことを「同情者」であつたと述べていることはいささか気になる点である。また、同書は父子の経歴を混在させてしまつている点で問題がある。例えば、本稿で引用した大塚俊一『タコマ日本人発展史』（タコマ時報社、一九一七年）、奥泉栄三郎監修『初期在北米日本人の記録 北米編第三十八冊』（文生書院、二〇〇七年）所収のアーネル（息子）に関する記述を父のことと誤読しており、ジョンは「日本に滞在経験もある優れた言語学者」であつたという解釈がなされているのである。同書はタコマの日本人移民の歴史に関する優れた成果であるが、本稿では、ジョンがバプテストの伝道活動に関わつていたことは確かであるとしても、彼がどのような

立場にあったのかは、さしあたり保留とさせていたきたい。なお、シアトル近郊のバプテスト教会関係者に「親日家」が多かったことは、伊藤一男『北米百年校』などからも明らかである（七四九―七六七頁）。

- (22) 津彌子、前掲記事「日米問題に狂死したアーネル氏の遺族を訪ふ記」（注（11））、一三三〇頁。

- (23) 大塚、前掲書『タコマ日本人発展史』、一三頁。伊藤一男『続・北米百年校（四）』（PMC出版、一九八四年）に収録された大塚の回顧録「回想のタコマ日本人タウン」にも、ほぼ同一の記述が見られる（同書、一三三頁）。

- (24) ただし、同年八月に、アーネルは米国外務省を退職している（本稿参照）。

- (25) 竹内、前掲書『米国外務省日本移民史』、七八五―七八六頁。

- (26) 『山梨県海外移住史』一九六五年、一一―二頁。山梨県の移民に関しては、廣瀬守令『在米甲州人奮闘五十年史』（南加山山梨海外協会、一九三四年、奥泉栄三郎監修『初期在北米日本人の記録 北米編 第二十一冊』所収、文生書院、二〇〇三年）も参照されたい。

- (27) 根川、前掲論文「近代日本人の海外体験と日系移民史の時期区分」

（注（10））、一一―一二頁。

- (28) 竹内、前掲書『米国外務省日本移民史』、七八五―七八六頁。

- (29) 同右、四五―四六頁。

- (30) 村川、前掲論文「日本人移民の「コスモポリタニズム」」（注（17））。

- (31) 津彌子、前掲記事「日米問題に狂死したアーネル氏の遺族を訪ふ記」（注（11））、一二八頁。

- (32) 一橋大学学術史編集委員会編『一橋大学学問史』（注（11））、一一〇―一三頁。

- (33) 法政大学編『法政大学八十年史』一九六一年、法政大学百年史編纂委員会編『法政大学百年史』一九八〇年等を参照されたい。

- (34) 法政大学清国留学生速成科に関しては、『法政大学史資料集 第十一集 法政大学清国留学生速成科特集』一九八七年に基礎的な資料が収録されている。梅と法政速成科に関しては、拙稿「法政速成科のメタヒストリー」（法

政大学国際日本学研究所・王敏編『日本意識』の根底を探る——日本留学と東アジア的「知」の大循環』所収、三和書籍、二〇一四年）を参照されたい。

- (35) 法政大学 X・Y・Z「学園風景 法政大学の巻」『法律春秋』南交社、第六卷第三号（一九三一年三月号）、九九頁。

- (36) 高橋敏太郎『受洗五十年の回顧』三光社、一九四二年。高橋の法政大学卒業年度については、法政大学校友名鑑刊行会編『法政大学校友名鑑』一九四一年等から確認できる。

- (37) 同右及び高橋敏太郎『基督教界の青年諸君へ』教文館、一九三七年。

- (38) 霞五郎『お濠に影をうつして 法政大学八十年史』法政大学八十年史刊行会、一九六一年、一三五頁、同『法政大学 物語百年史』一九八一年、一一八頁。

- (39) 「安東県の米領事館」『東京朝日新聞』一九〇七年七月一日。

- (40) 白田垂浪『最近学校評論』秋霜館、一九〇六年、一一―一頁。

- (41) シー、ゼ、アーネル「日本の踊と西洋のダンス」『旬刊朝日』第一卷第三号（一九二二年三月二日）。当該記事の存在に関しては、山川恭子「戦前期週刊誌メディアの受容形態——その「大衆性」と「戦争加担」との関係に着目して」（筑波大学博士論文、二〇一一年）にご教示を得た。

- (42) アーネル、前掲論文「日本の踊と西洋のダンス」。

- (43) 「積る恋雪の閑扉 廿余年前に米国へ 親日外交官が自ら映画化 歌舞伎紹介に狂奔」『東京朝日新聞』一九三六年一〇月二日。

- (44) 『官報』七五〇二号（明治四十一年六月三十日）。

- (45) 『官報』七五七〇号（明治四十一年九月十七日）。

- (46) 「米国新極東局長（大使館のミラー氏栄転）」『東京朝日新聞』一九〇九年九月三日。

- (47) 養原俊洋『アメリカの排日運動と日米関係』朝日新聞出版（朝日選書）、二七頁。

- (48) 大塚、前掲書『タコマ日本人発展史』(注(21))、二二頁。
- (49) 養原、前掲書『アメリカの排日運動と日米関係』、二四一五〇頁。
- (50) 秦郁彦『太平洋国際関係史——日米および日露危機の系譜1900—1935』福村出版、一九七二年、六三—六七頁、養原、前掲書『アメリカの排日運動と日米関係』、二三一—五〇頁。
- (51) 前掲記事「積る恋雪の関扉 廿余年前に米国へ 親日外交官が自ら映画化 歌舞伎紹介に狂奔」(注(43))を参照。
- (52) 『東京帝国大学一覽 従大正二年 至大正三年』(学生生徒姓名)、五二頁。
- (53) 同右。
- (54) 倉田、前掲書『エリセーエフの生涯』(注(6))、一九—二四頁。
- (55) 『東京帝国大学一覽 従大正元年至大正二年』(学生生徒姓名)、六—七頁。藤村によれば、ロシア人学生メンデルリンは早くに亡くなったという(藤村、前掲記事「アーネル君を憶ふ」注(7)、一一—四頁)。卒業生名簿にも名前が見当たらないことから、在学中に死亡した可能性が高い。
- (56) 東京大学百年史編纂委員会『東京大学百年史 部局史一』東京大学出版会、一九八六年、七一—五頁。
- (57) 元六会については、高木、前掲記事「折り折りの人 薩摩の殿さま 島津久基とアーネル」(注(9))、同『国文学五十年史』(岩波書店、一九六七年)、五二—五三頁、藤村、前掲記事「アーネル君を憶ふ」(注(7))、一〇九頁を参照のこと。
- (58) 高木、前掲書『国文学五十年史』、五二—五三頁。
- (59) 高木、前掲記事「折り折りの人 薩摩の殿さま 島津久基とアーネル」(注(9))。
- (60) 芳賀、前掲記事「アーネルさん」『国語と国文学』一九二五年二月号(注(7))、九三頁。
- (61) 前掲記事「積る恋雪の関扉 廿余年前に米国へ 親日外交官が自ら映画化 歌舞伎紹介に狂奔」(注(43))を参照。
- (62) 東京大学百年史編纂委員会、前掲書『東京大学百年史 部局史一』、七一—八頁。
- (63) Amell C. J., "Brief Note on Comparison Between the No and the Greek Drama" (邦題「能と希臘劇との比較断片」)『国語と国文学』一九二四年七月号、二〇—二三頁。
- (64) Slavov Perko Slavov 「外国人の目に映った能楽の明治維新——外に伝えられた能狂言のイメージ」大阪大学博士論文、二〇一四年、六一—六九頁。
- (65) Amell C. J., "Brief Note on Comparison Between the No and the Greek Drama" (注(63))、二三頁。
- (66) 藤村、前掲記事「アーネル君を憶ふ」(注(7))、一一—四頁。
- (67) 「排日を愛ひて米人教授発狂」『東京朝日新聞』一九二四年九月二七日。
- (68) 藤村、前掲記事「アーネル君を憶ふ」(注(7))、一一—一頁。
- (69) 芳賀、前掲記事「アーネルさん」(注(7))、九三頁。玉子によれば、アーネルは精神的な疾患のみならず、心臓にも持病を抱えており、継続的に治療を続けていたという(津彌子、前掲記事「日米問題に狂死したアーネル氏の遺族を訪ふ記」(注(11))、二二—八頁)。
- (70) 米国大使館の退職については、『外務省月報』(大正六年八月分)に記されている。その他の職については、同右及び、アーネル、前掲記事「日本の踊と西洋のダンス」(注(41))を参照。
- (71) 『東京帝国大学一覽 従大正十二年 至大正十三年』(学生生徒姓名、卒業生姓名)、七二—二頁。
- (72) 『東京商科大学一覽 自大正十一年 至大正十二年』一〇七頁、『東京商科大学一覽 自大正十二年 至大正十三年』、一〇七頁。
- (73) 「メドレー教授が舞台監督」『東京朝日新聞』一九二二年五月六日。
- (74) 一橋大学学園史編集委員会、前掲書『一橋大学学園史』(注(11))、一一—三頁。
- (75) 「アーネル氏の近松劇研究」『一橋新聞』一九二四年七月一八日。

- (76) 養原、前掲書『アメリカの排日運動と日米関係』(注(47))、一一〇—一一四頁。
- (77) 中村進「排日移民法成立の背景」『政経研究』第五二巻二号(日本大学法學部編、二〇一五年九月、三八六—三八八頁)。
- (78) 同右、三八七頁。
- (79) 養原、前掲書『アメリカの排日運動と日米関係』(注(47))、二八五頁。
- (80) 同右、二八四頁。
- (81) 津彌子、前掲記事「日米問題に狂死したアーネル氏の遺族を訪ふ記」(注(11))、二二八頁。
- (82) 以下の記述は全て、藤村、前掲記事(注(7))にもとづく。
- (83) 高木、前掲記事(注(9))。
- (84) 前掲記事「排日を憂ひて米人教授発狂」(注(67))を参照。
- (85) 「専門部生の美拳 狂へる旧師アーネル氏の為に同情金募集」『一橋新聞』一九二四年一〇月一日。また、東京商科大学一橋会『一橋五十年史』一九二五年、二九五—二九六頁も参照されたい。
- (86) 「日語学校設立準備」『東京朝日新聞』一九一三年六月一七日。
- (87) 「日本語を学ぶ西洋の大人連」『東京朝日新聞』一九一三年十二月一九日。
- (88) 「日米協会設立」『中外商業新報』一九一七年五月一日、渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料第三十五巻』所収、一九六一年、五五五—五五六頁。
- (89) 社団法人日米協会編・五百旗真他監修『もう一つの日米交流史——日米協会資料で読む20世紀』中央公論新社、二〇一二年、二四—三八頁。
- (90) 同右、二六頁。
- (91) Letter, George W. Guthrie to William J. Bryan, November 7, 1914. In Confidential U.S. Diplomatic Post Records, Japan, Part 1 1914-1918.
- (92) 「遺骸護送の儀礼」『東京朝日新聞』一九一七年四月二六日。
- (93) 津彌子、前掲記事「日米問題に狂死したアーネル氏の遺族を訪ふ記」(注(11))、二二八頁。アーネルの没後、大倉らの発起により、遺族義捐金の募集が行われている。アーネルの遺族への義捐金(見舞金)は、東京商科大学、東京帝国大学国文学科(「アーネル君遺族見舞金」『国語と国文学』一九二五年三月号。ここには芳賀、藤村とともに元六会的面々が名を連ねている)、大倉らの義捐金の計三ヶ所で行われた。
- (94) Isabel Anderson, *The Spell of Japan*, Boston: The Page Company, 1914, p. xiv.
- (95) 同著には、歌舞伎の一場面を演じる写真やアイヌの人々と撮影した写真など、数点のアーネルの写真が掲載されている。
- (96) 「アーネル氏逝く」『東京朝日新聞』一九二四年一月十一日。同記事には「享年六十四歳」とあるが、明らかな間違いである。
- (97) 高木、前掲記事「折り折りの人 薩摩の殿さま 島津久基とアーネル」(注(9))。
- (98) 藤村、前掲記事「アーネル君を憶ふ」(注(7))。
- (99) 藤村の英語教育廃止論(英語科廃止論)に関しては、藤村作『国語問題と英語科問題』(白水社、一九四〇年)、川澄哲夫編『資料日本英学史2 英語教育論争史』(大修館書店、一九七八年)にそれぞれ収録されている。川澄によれば、藤村の英語教育廃止論は、「いたるところに大きな波紋を巻き起こし、『学校の教員室に、実業団の倶楽部に、各氏(ママ)の応接室に、政界の一角に、大中の学生間に、路行く人々の界限に、或は電車汽車中にまで』(『現代』六月号)、その是非をめぐって、さかんに論争が行われた」という(同書、二三三頁)。
- (100) 藤村作「英語科処分論争について」、川澄編、前掲書『資料日本英学史2 英語教育論争史』、三三七頁(初出は、『現代』一九二七年一〇月号)。
- (101) 藤村、前掲記事「アーネル君を憶ふ」(注(7))、一一五頁。
- (102) 芳賀、前掲記事「アーネルさん」(注(7))、九三頁。
- (103) 同右。
- (104) 石川忠雄「ワシントン大学における中国研究」『季刊外政』一九五八年八

月号（日本外政学会編）、一二六—一二七頁。

(105) 津彌子、前掲記事「日米問題に狂死したアーネル氏の遺族を訪ふ記」（注

(11) 二三〇頁。

(106) 前掲注（15）を参照。

(107) 「排日移民法」成立時における日本のメディア報道と言説については、  
原、前掲書『アメリカの排日運動と日米関係』（注（47））、二八四—二八六  
頁。